

伊庭想太郎の「教育論」

——『学之友』の論考を中心に——

水野雄司

問題の所在

明治三四（一九〇二）年六月二日（金）、時刻は午後三時過ぎ、一人の男が殺された。

大臣の経歴もある政治家、星亨^{ほしとおる}（二八五〇～一九〇二）である。享年五一歳。十数名の人が出席していた会議室で「それ」は行われた。公人が白昼堂々殺害されたということで、テロと言っている。場所は、東京市役所の会議室であり、その日は市参事会の例会日であった。事が起こったのは、会が一通り終わり、何人かは退出しながらも、星はまだその場に残り談笑していたときである。

黒組^{くろぐり}の三つ紋の羽織^{はおり}と、茶色の仙台平^{せんだいひら}の袴^{はかま}をはいた体格のいい男が、悠然と会議室に入ってくる。会の参加者でないことは一目瞭然であったが、きちんとした身なりと紳士然とした態度から、誰かの面会人だろうと怪しまれることはなかった。ところがすたすたと星に向かっていったその人物は、突然懷に手を入れ小刀を抜き出すと、そのまま星の背後にまわり「逆賊星」と叫び、その切っ先を胸部に突き刺した。うめきながら倒れた星に覆いか

ぶさるようにして、さらに腹部などを複数回刺し、星はその場で絶命する。凶漢は、居合わせた人にその場で取り押さえられたが、特に抵抗することなく、「他のものに危害は加えない。また逃げるような卑怯な振る舞いもしない」と言い放ち、大人しくその場に駆け付けた警官の縄についた。

犯人の名は、伊庭想太郎（一八五一―一九〇七）。凶行時の年齢は五〇歳と、星とほぼ変わらない。政治家として周知の星とは異なり、一般に知られている人物ではなかったが、東京農業学校の校長や貯蓄銀行の頭取といった輝かしい経歴を持っていた。

本稿では、この伊庭の教育観を、星との比較のもと検証する。星の教育に対する反発こそが、この事件の動機だったからである。さらにそれは、当事者の思いに留まらない、時代の軋轢あつれきと言つていいものであった。

一、伊庭想太郎とは

「教育家」という肩書

伊庭想太郎とは何者だろうか。「東京農業学校の校長や貯蓄銀行の頭取といった輝かしい経歴」と前述したが、これは「斬奸趣意書」に拠るものである。

「斬奸趣意書」とは、伊庭が決行直前に作成し、殺害時に懐にしていたものである。ここに書かれているのは主に犯行動機であるが、加えて自身の略歴も付されている。これは、自分がどこかの政党に属しているわけではなく、よって今回の殺害が政党間の争いではないことを証明するためのものであった。それは次のようなものである。